

# 東京鷹桜同窓会報



帰省して また眺め遣る 父母の山

(丸川 満)

## 巻頭の言葉

高橋正二

東京鷹桜同窓会会長  
明治薬科大学顧問



ゴルバチョフ大統領の帰国後は、日本国内の浮かれ風潮が急に冷却した。ゴ大統領が誕生した直後の昨年4月「世界言論人会議」に参加、また9月には「日本文化週間」に出席のため、再度訪ソして種々見聞したが、「北方領土」「シベリヤ不法抑留」問題については誰一人として色よい返事をする者はいなかった。

今年4月ゴ大統領来日に当り、彼の側近者たちが続々と露払い役としてやって来た。プラウダ総編集長フロロフ氏、大統領報道官イグナチェンコ氏、ノーボスチ通信社長ウラソフ氏、文部大臣ヤコージン氏等々。私はこの人たちの講演・セミナー、歓迎昼食・晩餐会、送別会には大抵出席し、指名を受けて歓迎あるいは送別の挨拶を述べる機会を与えられ、まことに印象深いものがあつた。しかし、彼らは共通して「北方領土・抑留問題」については全く否定的であつた。ゴ大統領も国内事情に縛られて遂に大きな収穫もなく帰国させるを得なかつた。

われら日本人は、これらの問題解決を悲願として忘れてはならない。これからが正念場である。

(昭7卒)

## 赤十字の旗とともに



## わが道を行く



「赤十字」の言葉や文字でお目にかかったことがある、いやどこかで聞いたことがあるような……。

ところで一体赤十字とは何物なのか。世の多くの方々がその言葉の響きや文字から、具体的に聞かれると一寸たじろぐ。わずかに自分との関わりをもった部分の記憶が引き出されると、それは「病院」であったり、「献血」であったり、遠い昔に遡れば戦時中の「病院船の看護婦」であったりということになる。それでは、赤十字とは一体どのようなものであるかを、私の経験を通して紹介してみます。

さて、話は30年前に遡るが、私は日本赤十字社に席を置くこととなり（現在もまた然りなのであるが）、その時期の前半、すなわち昭和30年代前半は、戦後の混乱がまだ尾を引き、しかも自然の猛威は狩野川水害、伊勢湾水害という大災害を疲弊した未整備の国土にもたらしていた。当時学生の私は、水害被災者の救援のため山と積まれた国民の寄託による救援衣料を被災地に送る仕事を手伝うため、日本赤十字社の作業場にいたのであるが、これが30年に及ぶ赤十字との縁になろうとは全く思いもよらなかった。この災害救援が一つの機縁となって昭和36年に入社したが、この時期は日本経済もようやく発展の途をたどりつつあり、社会の状況も東京オリンピックなどを展望して活気づいてきた頃であった。しかし、入社したものの、赤十字について大した勉強をしたわけではなく、たまたま災害救援で汗を流した程度では先が思いやられること頻りであった。

さて、入社して赤十字について勉強した基本的なことをまとめると次のようになる。

(1) 赤十字はスイス人アンリー・デュナンが提唱し、「戦場における負傷者は敵味方の区別なく救護すること。これらの負傷者および救護に当たる人々は中立とみなして攻撃してはならないこと。各国は救護団体を平時から設立しておき救護の資

材も準備しておくこと」等についての国際協定を結ぶ基を開いたこと。

(2) この国際協定を実現させるため、スイス人による5人委員会（現在の赤十字国際委員会）が組織され、ジュネーブに事務所を置き人道条約（ジュネーブ条約）の発展とその実施をはじめ、世界赤十字人道事業の中心となっていること。

(3) この5人委員会が組織された日を記念して、1863年（文久3年）2月17日を赤十字の誕生日としたこと。

(4) 白地に赤十字を標章としたことは、提唱者であるアンリー・デュナンの生まれた国スイスに敬意を表し、スイスの国旗の色を逆にしたこと。

(5) 各国赤十字社は、赤十字の本質に関する基本的諸原則（7原則）、すなわち①人道、②平等、③比例、④公平、⑤中立、⑥独立、⑦世界性に基づき活動しなければならないこと。

(6) 一国一社であること。

(7) 平常時の各国赤十字社の連合機関として、ジュネーブに赤十字・赤新月社連盟を設立したこと。

(8) 日本赤十字社は、1877年（明治10年）の西南戦争に際し、時の元老院議員佐野常民、大給恒おぎやうゆづるが創立した博愛社が前身で、日本政府のジュネーブ条約加盟により1887年（明治20年）日本赤十字社と改称し、現在に至っていること。

以上のような赤十字の概要を学んだのであるが、日々の業務に忙殺され、その原点など振り返る余裕もなく今日まで来ている。

しかしながら、世の動きとともに赤十字もその基本的原則のもとに、その時代、その時に応じその役割を果たしてきたこともまた事実である。変転する世界情勢、高齢化社会が急ピッチの日本、この動きに対応していくために“赤十字は何をなすべきか”を自問しつつ、国民の期待に添った活動を展開するべく、私も赤十字の旗とともにさらに努力していく所存である。（昭31卒）

小形 正明

日本赤十字社振興課長

## 先生お元気ですか

## 3度目の赴任となり

高橋 實先生  
長井高校教頭  
(国語)



東京鷹桜同窓会の皆様にはその後益々ご健勝にてご活躍のことと存じます。日頃、母校の教育活動に対しご支援を賜り厚く御礼申し上げます。また先日の創立記念日の折は遠方からわざわざお出頂きまして誠に有難うございました。お聞きしますと昨年度は新入会員歓迎の宴を開いて下さったとのこと、今後も卒業生が御地でお世話になることと思っておりますので、何とぞよろしくお願い申し上げます。

私は今春4月、本校に転勤を命ぜられ、3度目の赴任となりました。久方ぶりに長井に帰ったら昔の美少年、美少女たちが課長、主任となり、71年の伝統を支える中心的教員として活躍しているのを見、時の流れを感じながら今は彼らに支えられて任務を全うしております。

さて学校の方は指導要領の改訂によって家庭科が男女必修となったことから、家庭科棟の建設が決まり年度内竣工の予定です。また長年の夢であったステージのある体育館、先輩諸氏をご存知でしょうが、行事の度毎に授業をカットしてのステージ造りをした記憶があるだろうと思います。お蔭様にて今年度設計予算が付きましてので、全職員で検討を重ね県下一の体育館を造ろうと努力しており、平成5年度にはステージ造りから解放される見込みであります。

ついで学習面を申し上げますと、今春の大学進学は創立以来の好成績でありました。生徒、父兄の頑張り、指導陣の熱意もさることながら、先輩諸氏の素晴らしい業績が励みとなったことも事実であります。今後はこの上昇ムードを持続させるためにも生徒たちの挑戦者精神を呼び起こし、教職員一丸となって本校の隆盛を図りたいと考えているところであります。

最後に東京鷹桜同窓会の皆様方のご多幸と御会の益々の発展を心からお祈り申し上げましてペンを置きます。

## 今 CS-203のスピーカとともに

相田良一先生  
加茂水産高校校長  
(生物)



今夜も6畳と8畳二間つづきの部屋一杯にパイオニアCS-203のスピーカからモーツァルトのバイオリン協奏曲が流れている。実はこのスピーカは、私が長井高校にお世話になった翌年、昭和37年にパイオニアがNHKのモニタースピーカとして開発したものである。このスピーカを1本購入するのに、3か月間は飲まず食わずの生活をしなければならぬほどであった。このスピーカを昭和48年に英国製のタンノイのスピーカを買うに及んでお蔵入りしておいた。

この4月に、庄内浜にある加茂水産高校に転勤した。もちろん単身赴任である。音楽のない生活は考えられない。よし、あのスピーカを引っ張り出し最新式のアンプとCDプレイヤーをつなぎ鳴らして見よう。鳴るではないか。30年前、山銀の前にある㊦醤油屋(下宿)さんの2階の室で聞いたコンパクトではあるが、あの艶のある音が18年振りに加茂の官舎に響き渡った。

じっと目を閉じてバイオリンの音色に耳を傾ける。追いかぶさるように、長井高校時代の思い出が走馬灯のごとく脳裏に蘇って来る。長井理研に借金をしながらLPを購入し、盤が擦り減るまで名曲に聞き惚れていたこと。このスピーカを運んで図書館で開いたステレオコンサート、当時お世話になった同僚の先生方、そしてなつかしい教え子たちの顔々、学校にあったホンダカブで、家庭訪問しながらかけめぐった置賜平野…。

私がお世話になったのは、昭和36年4月から5年間である。大学をでたばかりで、がむしやんな私を生徒はよく支えてくれた。この5年間で、私が教員としての基盤を築いてくれたものと思って感謝している。去ってからも、幾多の教え子や同僚の先生方が励ましてくれた。本会にも多くの教え子がいるものと思っている。会の益々のご隆盛と会員皆様のご健勝を祈って止みません。



## 謀 反 心

### 人生の並木道

長谷部 茂吉



明治43年、幸徳秋水らに対するいわゆる大逆事件の死刑判決が言渡され、翌年その刑が執行された。そして、その直後旧第一高等学校（一高）で、徳富蘆花が「謀反論」と題して演説をし、人には謀反心が必要だとして、政府がなぜ天皇を補佐して減刑等の措置を講じなかったかと非難し、学校当局、文部省を驚愕させた。

私が謀反論を知ったのは、裁判所を退職した後のことだから、これから記すことはこの演説と関係がない。ただ、この演説のことを知って我が意を得たりと感じたので、冒頭にこれを揚げた次第である。

さて私の人生も謀反の連続だったように思う。ただ、その謀反には一本の筋を通したと私は信じている。

(1) 第一の謀反（反抗）は、私が中学4年で一高の入試に失敗し、翌年再度受験する時である。天笠校長は私が中学4年のとき山形高校を受けるように、学費は自分がなんとかするといわれて、石井先生に山形高校への受験願書提出の手續を命じられた。しかし、私の父はすでに孫田秀春先生に万事お願いして一高受験の手續をとったのだから、今さら山形高校を受けるとはいえないといって一高を受けさせ、結果は失敗に終わった。それで、中学5年のとき天笠校長は今度こそ山形高校を受けるようにといわれたが、私は、すでに小林宗五良君が山形に入ったのだから、その後塵を拝することはできませんと答えたので、校長は呆れた顔をされて、それなら何年でも一高を受けるがいいさと捨台詞をいわれたのであった。

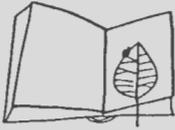
(2) 昭和15年興亜院華北連絡部調査官として北京在任当時、華北政務委員会が中国法にない無議決権を華北交通有限公司(株式会社)に発行させるという議案を作成して、連絡部に送ってきた。華北政務委員会(汪精衛の中国政権下の華北の政府といつてよい)の議案はすべて連絡部のチェック

を受けることになっており、そのチェックは連絡部政務局の総務がすることになっていたもので、その議案が総務主任の私のところに廻ってきた。私はこれを見て、これは中国法にない無議決権株の発行を議案とするものだから認められないといって、判を押さずに突返した。そして塩沢長官(陸軍中将)から呼出しを受け、長官室に出頭したところ、部屋には議案の事実上の作成責任者(内面指導者)である経済三局長(陸軍大佐)がおり、長官から議案になぜ判を押さないかといわれ、私は中国法にない株式の発行を企図するものだから押せませんと答えたところ、長官はいいから押せという。私は、いや、押せません。長官、押せ。私、押せません。何回か押問答を繰り返した末、私は失礼しますといって長官室を飛び出したが、その時の経済三局長の呆然とした顔が忘れられない。

(3) 東京地方裁判所商事部の総括(戦前の部長)当時、ある全国裁判官会同の席上、事務総局中心の人事が行われているのは不当、裁判所は裁判に従事している現場裁判官中心の人事を行うべきであると声を大にして演説をぶつたので、その席に並んでいた最高裁長官はじめ各裁判官、事務総長以下各部局長、部局員、会会員など数十名全員がシーンと静まり返ったのであった。私の水戸地家裁所長当時、ある最高裁判所判事(のち長官になられた)が巡視に来られた際、君は学者になればよかったねといわれたが、それは裁判官としての先はないよという引導だったと私は思っている。事実、私は東京地方裁判所長で定年を迎えた。

(4) 一高撃剣部の先輩で学生当時生活面でお世話になった大恩人、佐々木保蔵先生の女婿で、元最高裁判所長官の石田和外さんに、公的面ではあるが終始反抗的態度をとり、特に石田さんの東京地裁所長当時設けられた新件部を、石田さんの後任の松田二郎所長の下で第二所長代行として普通部とすることに協力したため、石田さんは私を忘恩の徒と思われたようであった。(大14卒)

## 曾祖母と祖母に学んだこと



吉田志津

東京鷹桜同窓会副会長



私は満3歳で母を失い、曾祖母と祖母に育てられた。曾祖母は、私が5～6歳の頃から線香、ろうそく、生花をもたせてよく墓掃除に連れて行った。その曾祖母は昭和7年に77歳で亡くなったが、病

気の時も動ける間は毎朝、きれいな雑巾を持った継母を従え、自分で仏壇を掃除し、お茶、水、御飯を上げて御参りするのが行事であった。

私の家は昔は米屋だった。曾祖母はあまり大きくない人だったが、成人男子でもなかなか出来ない米俵(16貫)の縄かけがとてもうまかったし、実によく働いた人だった。そして口数の少ない静かな人だったが、子供心にも家中で一番偉く思われた。

私の母方の祖母は、私が女学校2年生のとき亡くなった。母の実家は長井の町うちでも大きな農家で、昔の家だからもちろん大家族であった。祖母が肝臓癌で入退院を繰り返していたある時、跡取りの叔父がある事件を起こした。そして私の父が、その事件の後始末をした。その最後の評定の場で、祖母が叔父に向かって「我家にはお前がいなくとも跡を継ぐ者がいるから、お前は家を出て好きなように生きろ」と言った時、祖父が「それはもごさい。やめろ」と止めた。祖母は「そんじやらばお前様も一緒に出ていきなされ」と言ったが、この件はその後一時治まった。父は女学校2年の私に「…こういうことだった。ばばちゃんは偉い」とぼつりと語ってくれた。それから間もなく祖母は亡くなった。祖母の死後、何代も続いたその家が滅びるのに時間はかからなかった。一人の力は微々たるもの、しかし一人の力の何と大きいものかをあの時に知った。

柳田国男先生は「昔は一家族が今よりはるかに大きく、男も女も一生働いても、すべてが主人となり主婦となり得るとも定まっていなかった」と言われた。その主婦となってしなければならない

ことは、(1)その家の神を祭ること(心の支配者)であり、(2)食物・衣料を分配すること(生産計画も含めて生活力の支配者)である。(1)については女性には昔から巫女的性格すなわち霊力があり、家の神、時には共同体の神の司祭者として家族の精霊を司り、女性はその霊力によって常に判断と決断をしていたことを意味する。(2)については、主婦にとって大切なことは衣食を丁度よく分配することであった、といえる。これらの任務を遂行するのを管理といい、管理の中で後継者教育、家族の幸せの教育が行われる。最初に書きとめた曾祖母は(1)の例、次の母方の祖母は(2)の例となる。民俗学を学び、そのことを知った時は大きな感激であった。

ところで、明治維新の国家組織の再編成をする時、それまで家の内外に確立されていた女性の座は完全に消されたまま制度化されてしまった。これに対する平塚らいてう、松井須摩子、山川菊栄らによる婦人解放運動も「英国や米国ではこのようにしている」式で、庶民階級の女性の生活の歴史と現実をまったく無視しての進め方であった。その後、昭和の戦争を言語を絶する苦難で乗り切った我が国の家制度は、高度経済成長を通して大家族から核家族に分裂し、家庭の主婦の後継者教育の場と時間をなくし、家庭の経営全体を考え家族に対して精神的・教育的つながりを維持していく家政に混乱が始まり、深刻化している。

この混乱を打開するためには、柳田先生の言葉「どういう経路でこうなったか／いつからこんな風になったか／次はどうなるだろうか」を自分の今の生活の中からじっくり探し求めることだと思う。そして「外に出て年寄の話を聞いて書きとめなさい。書いたものは残るが、その人が死ねば、その年寄のもっていた貴重な資料は永久になくなってしまふ」という言葉を心からかみしめたい。

祖母の祈り 曾祖母の祈り ひっそりと

うちを流る このくしきもの

(昭9卒)

## 同窓会とわたし



池袋の東武バンケットホールに多数の同窓生が集い、長井高校創立60周年記念の総会が開催されました。私が初めてこの会に足を運んだのはこの時でした。

受付ではたくさんの方がいろんな役を分担し、“大勢の人が係っているんだなあ”という印象を受けたことを覚えています。何か私もお手伝いしなければ…という気持ちに動かされ、以来みなさんの後に付きながら、早や10年が過ぎてしまいました。

最初、先輩方や旧知の方々に声をかけていただいたりで、とても嬉しく懐しさに浸っていました。60周年ということもあって大勢の出席があったのでしょうか。期待して翌年も出かけたのですが、出席者も少なく同級生は一人もいない寂しいものでした。

同窓会のイメージはどうしても年配者の集りという先入観からか、若い人にはなかなか足の向けにくいところでした。何となく自分が若い気分でいられたのもその頃でしたが、近年は変わってきたように感じられます。もはや二代目・三代目が卒業する時代になってきています。年々若い方たちも増え、「アラ、〇〇さんの息子さん!」「△町の〇〇さんの孫があ」などの会話が聞かれ、親しく声をかけ合う光景は美しいものです。

今年、卒業して30年目に当たる私たち昭和36年卒業生は、“つどい学年”として、本部の総会に招待を受けました。

豪華なシャンデリアとレインボーのような光彩に照らされた天井に、しばらく見とれていました。長井にもこんな素晴らしい会場(TAS)があることを知り、今さらのように時の流れを感じました。

私たちが3年生の時が創立40周年記念の年で、校舎は木造なのに、記念事業として建設された体育館だけが近代的で立派になり光っていました。現在、周りの様相はすっかり変っているのに、逆に体育館だけがそのままの姿で残っているのはと

ても懐しく感動的でした。

あの頃そこで学び合ったというと格好はいいのですが、とにかく30年ぶりの再会でした。

「いやあ、久しぶり…」「元気!」「今、どこにいるの?」「何してるの?」と矢継ぎ早にアチラコチラから聞え、そして見えてくる、あの懐しい声と顔。

風雪に耐えながら30年を経過した体育館なら、私たちも各々に試行錯誤を繰り返しながらの30年でした。しかし、伸びのびと生きいきと、そして希望をもって過ごしてこられた30年の足跡が感じられ、昔・乙女も腕白な少年たちも、また黙々としたがり勉やさんも、みんな輝いていました。

このような企画が催されるようになったのは、どなたの発案なのでしょう。とてもタイムリーであり、素晴らしいことと感心しています。曲がりなりにも社会に貢献できる年齢となり、家庭的にも子供の成長と共に落ち着き、それほどまでに老けていない時機というのも嬉しい限りです。

これを契機にこれからの新しい交わりが出来ること、人と人との絆がさらに太くなっていくことを期待しているところです。

また、これでようやく同窓生の仲間入りが出来たかなという感じを持ちました。この“つどい学年”の卒業生が、たくさん集ることによって、総会を盛り上げる立役者になっているようにも感じました。

東京鷹桜同窓会総会も間近になりました。会を盛り上げてくれる新しい方たちの大勢の参加を期待しながら、そして、いくつになられても、青雲の志を忘れない“心の青年”である先輩の方々の姿に刺激を求めて、今年もまたいそいそと出かけて行くことでしょう。

遠く残雪がキラキラと輝く飯豊山や、緑濃くなだらかにつづく東の山を見渡せる、当時の早苗ヶ原を想うかべながら、声高らかに校歌を歌いましょう。(昭36卒)

末吉 暁子  
東京鷹桜同窓会会計

## 鷹桜通信

**林崎春子**(昭4卒) 東京鷹桜同窓会報、内容も充実し、たいへん楽しく拝見しました。故郷の松川・東山・西山などが思い出され、若き日の自分がパノラマのように描き出されてきます。出席し皆様にお目にかかれれば楽しさも百倍すると思いますが、残念ながら都合で出席できません。

**村田俊子**(昭9卒) この夏、思い出の長井駅から伊佐沢方面まで車で連れて行ってもらいました。私が卒業した女学校はすでに無く、淋しい感じでいっぱいでした。私も、もう昔の人になったようです。

**鈴木いと**(昭10卒) 幹事の皆様のお骨折りありがとうございます。会報も楽しみに拝見しております。ことに、吉田志津さんのは懐しく拝見いたしました。

**横山きみ子**(昭15卒) 去年出席させていただき、久しぶりに皆様にお会いして、感激しました。今年は都合が悪く欠席させていただきます。ますますのご盛会をお祈りいたします。

**菅 英一**(昭17卒) 事務局ならびに役員の方々いつもご苦労さまです。この時期は会合が多く、このたびも地域の会合と重なり、残念ですが参加できませんので、皆様方によろしくお伝えください。会のご盛会をお祈りします。また、会報を楽しみに待っております。

**斎藤 斉**(昭19卒) いつも欠席ですみません。今回も楽しく会報を読ませていただきました。幹事さんありがとうございます。

**斎藤利雄**(昭20卒) 今回も仕事と重なり出席できず残念です。会報の中の守谷辰雄先生のお元氣な姿を拝見し、嬉しく存じています。黒板の数字がきれいだったことが、昨日のこのように思い出されます。

**菅原昌宏**(昭26卒) 東京に事務所を出して5年になります。海外出張が多く、出席できないのが残念です。次回はなんとか都合をつけます。

**千葉早苗**(昭26卒) いつもお誘いありがとうございます。ボランティアの活動を少々やっております。その会合と重なるため、残念ながら出席できません。

**風見琴子**(昭28卒) 会報のお写真を拝見し、ふるさとで過ごしたあの日あの時のことが、昨日のこのように懐しく思い出されました。

**武田律子**(昭34卒) 会報9号に、39年卒の紺野さんからの通信文、第8号に載せていただいた私の拙文に興味を持ってくださり、嬉しく思います。そのお便りをもっと早く知っていたら、紺野さんのコンサートに間に合ったのにと残念でした。でも、まだ見ぬ後輩の方とこうして交流できるのも会報のおかげですね。

**大崎弘子**(昭40卒) 会報をいただくたびに、忘れかけていた高校時代を懐しく思い出します。自動車部に籍を置き、水野多門先生、高橋 静先生、相田良一先生、佐藤忠男先生には、たいへんお世話になりました。

**藤田健二**(昭43卒) いつもご案内ありがとうございます。本年こそは出席したいと思っておりましたが、9月末より中国上海に業務出張となりますので、欠席させていただきます。

**塩森真知子**(昭44卒) 本年も出席できず残念ですが、来年あたりは子供も大きくなりますので、出席できるかと楽しみにしております。

**宮川由美**(昭46卒) 初めて会報をいただき、とても嬉しく思っています。総会も出席したいのですが、友人の結婚式と重なり、出席できません。来年は、ぜひ参加したいと思っております。

**手塚由利子**(昭50卒) 会報をお送りいただきありがとうございます。東京でもこのような長井高校同窓会が開かれているとはまったく知りませんでした。今年は出席できませんが、来年の開催を楽しみにしております。

**北村成子**(昭51卒) 横浜に住んで6年になりますが、はじめて会報を拝見しました。春に卒業生名簿が送られてきて、あらためて長井高校の歴史を知った思いがしました。来年は出席させていただきます。

**絹山淳子**(昭51卒) 同窓会の通知が届くたび、とても嬉しく感じます。子供が小さいため、まだ出席できませんが、これからもよろしく願いたします。

**佐藤和佳子**(昭53卒) 初めてご連絡いただきました。思いがけず、懐しく、とても嬉しく思っております。私は、高校卒業後看護学校に入学し、看護婦として働いておりましたが、思うところあって立教大学法学部3年に入学し、現在3年在学中です。また、在宅者看護研究センター(高田馬場)に勤務しており、2足のわらじの生活です。忙しくもありますが、充実した日々を過ごしております。

## ◇ 事務局からお知らせ ◇

## (1) 行事・活動の記録

2年9月9日 東京鷹桜同窓会の平成2年度の総会開催のために、坂本キミ子さん(昭35卒)の御厚意で中央リサーチセンター事務所にて諸準備を行った。昭和27年卒・35年卒の世話役の皆さんの御協力により、約3200通の案内状・会報の発送を完了した。



2年10月14日 東京鷹桜同窓会定例総会を銀座の高松にて菅 七郎さんの司会で開催した。参加者数168名(新人会員34名含)。母校よりは新任の草壁校長、草刈事務局長、鈴木豊田支部長が出席された。新人歓迎会も兼ねた総会のため、年齢差を忘れた歓談となり、従来の総会とは異なり若々しくも賑やかなムードの一日となった。

その際、6月の長井市清水町の爆発事故で被害を受けられた鈴木松市先生への災害御見舞の提案が、那須常一さん(昭26卒)より出され、総会出席者一同より御寄附をいただき、鈴木先生をお慰めすることになり、嬉しい次第でした。

2年11月30日 原宿の水交会にて反省会を役員・担当学年・事務局員(28名)の出席で行った。

3年2月9日 長井本部の鷹桜同窓会支部長会議に高橋会長が出席された。

3年3月7日 役員・事務局会議を土屋・小串・味岡法律事務所で開催。平成3年度総会および学年幹事会の日時などについて協議した。

3年6月5日 学年幹事会を日本出版クラブで行った。平成3年度の総会担当学年の紹介、総会案内の発送日時、総会開催会場が決定。また役員の改選について話合われ、副会長の吉田志津さんの辞意が報告されるなどしたが、人事については

10月の総会にはかられることになった。

さらに、高橋俊龍さん(昭25卒)の都副知事就任祝賀会に東京鷹桜同窓会も発起人の一員として参加することを決定した。7月22日に、市ヶ谷の私学会館にて盛大に開催された。(石井宏子)

## (2) 平成2年度会計報告

		(平成3年3月31日現在)	
〈収入〉		〈支出〉	
前年度繰越金	1,343,330	総会費	1,074,780
事務費(755口)	715,190	事務費	130,713
幹事会費	307,000	会議費	567,767
総会費(135名)	930,000	会報印刷費	189,209
祝儀	50,000	渉外、交通費	84,610
助成金(本部より)	10,000	通信費	365,918
広告料	10,000	計	2,412,997円
受取利息	14,755	次年度繰越金	967,278円
計	3,380,275円		

(末吉暁子)

編集後記 今回から赤堀綾子さん(昭35卒)と遠藤 剛君(昭49卒)に編集スタッフに加わってもらった。私も、実に意を強くしております。お二人とも編集作業は初体験とのことでしたが、原稿の整理から割付作業、そして校正作業に至るまで多忙のなか協力していただいた。これで作業の一通りをマスターされたものと思います。

さて、同窓会とは何ぞや? そして会報はいかにあるべきか? これは、私がこの会報制作を引き継いでからいつも考えていることである。前にも書いたかも知れないが、同窓会とは飲んで食べて楽しい思い出話をする——それはそれで結構だが、それだけではない。横の同窓会(同級会)ではなく、縦の同窓会であるから実に幅広い方々が参加する。初対面の人と話をする。同じ置賜出身だから話題も多い。そしてその人を知り、新しい発見をする。そのことが、ひとときのオアシスとなり、明日への活力源にもなっていくだろう。

私たちにとって、高校時代を振り返ってみれば楽しい思い出ばかりがある訳では決していない。だが、常に前を向いて歩いて行きたいものである。そのためにも、この会報には様々な立場から、同窓会という枠組みにとらわれず、個々の自由闊達な精神で書いていただいている。(丸川 満)